

## 主体的・対話的で深い学びをめざした 国語科学習指導のあり方

～ICT 活用と交流活動に重点をおいて～

大阪市立高津小学校 簀下 泰弘

### I はじめに

2030 年には日本の生産年齢人口が 7000 万人台を割りこむ。さらにはコンピューター（人工知能・ロボット）の進歩により今ある仕事が約 40%なくなると言われている。社会は急激に変化し、先行き不透明な時代が差し迫っている。このような時代の突破口を切り開くためには、出合う問題に対して、大量に溢れる情報から解決に必要な情報を取り出して、より専門的なコンピューター知識や技術を駆使して、活用する。さらには、他者と協働し、知恵を出し合い、新たな価値を創造しようとする資質や能力が求められる。

また、教育的課題においては、全国学力・学習状況調査「国語科 B 問題」の結果からも「目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすること」に課題があることが明らかになっている。

このようなことから国語科の新学習指導要領においても、情報を活用する力を身に付けるために「情報の扱い方に関する事項」が追加されている。また、文部科学省の HP「国語に求められる力」には、他者との「コミュニケーション」を通して「生きる力」を培うことが強調されている。

こうした社会情勢や教育的課題を鑑みると、ICT 器機の活用や他者との関わりを通して、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりに重点をおいて指導することがさらに求められる。

以上のことから、本研究主題を「主体的・対話的で深い学びをめざした国語科学習指導のあり方～ICT 活用と交流活動に重点をおいて～」とした。

### II 研究の基本的な考え方

#### 1. ICT 活用について

本研究での ICT 活用とは、主に「タブレット端末の活用」を示す。そこで、以下の 3 点に重点をおいて、児童の判断力や伝え合う力、学習意欲を高めることができるようにする。

#### ○考えの選択化

#### ○考えの可視化

#### ○考えの共有化

#### 2. 交流活動について

コミュニケーションとは、主に対話的な学びの中核となる「交流」を示す。交流の際には、以下の 3 点に留意して行う。

○短時間で簡単にできるペア交流を取り入れることで、誰でも聴いてくれるという **安心感** をもてるようにする。

○自分の考えは相手に必ず伝える場を設定し、相手との対話の **習慣化** を図る。

○共通点・相違点を見つけるのか、考えをまとめるのか、相手の考えをもっと詳しく知ろうとするのか等の交流の **目的** を明確にする。

### III 研究の仮説

主体的・対話的で深い学びに向けて、三つの仮説を基に研究実践をすすめる、検証する。

**【視点①】 ICT の活用による選択・共有・可視化**  
考えの選択・共有・可視化を重点において ICT を活用することによって交流が活性化し、学習への理解が深まるのではないかと考える。

**【視点②】 小集団編成の工夫**  
生活班のグループではなく、習熟度別に分けたチームで学習することで、学びが深まりやすくなるのではないかと考える。

**【視点③】 主体性を高める工夫**  
学習目的や内容を意識できるように工夫したり、発問を工夫したりすることで、見通しをもって主体的に学習する姿勢がより育つのではないかと考える。

### IV 授業の実践と考察

1. 対象 第 5 学年 児童 21 名

2. 教材名 世界で一番やかましい音

3. 実践期間 平成 30 年 6 月上旬～中旬

#### 4. 付けたい国語の力

本単元で付けたい言語の力を新学習指導要領の「C読むこと」の指導事項から以下4点とする。

イ「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。」【構造と内容の把握】  
 エ「人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。」【精査・解釈】  
 オ「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」【考えの形成】  
 カ「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。」【共有】

この付けたい力を育むために、「C読むこと」の言語活動例イ「詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動」を具体化した「物語の山場を捉えて、本のおもしろさをデジタル『オセロボード』で紹介しよう」という言語活動を取り入れる。  
 『オセロボード』とは、変化する前の（黒）から、変化した後の（白）について、「何がどのように、なぜ変わったのか、」を友達どうして紹介し合う活動である。この活動を通して、物語の仕組みを理解するとともに、考えを形成し、交流を通して共有できることねらったものである。ボードの内容を①物語の内容（時・場所・人物の性格）、②何がどのように変わったのか、③なぜ、変わったか、物語から学べる考え方や生き方、以上の4点をボードに簡潔にまとめるようにする。

#### 5. 目標

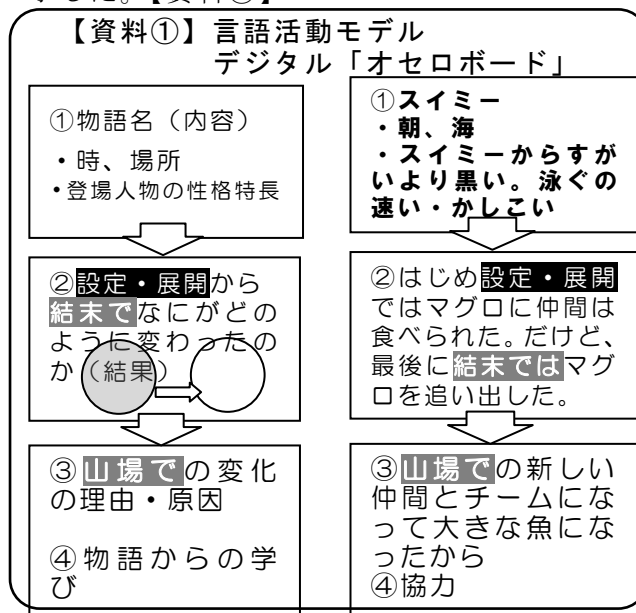
- 登場人物の心情や情景の変化を通して伝わってくる物語のおもしろさやよさを感じ取り、作品を読み味わう。
- ・ 物語の構成を捉え、山場で起きた変化について考えながら読むことができる。
- ・ 物語文にある変化する前の言葉や変化した後の言葉に関係付けて、山場が伝わるように構成を工夫して話すことができる。

#### 6. 学習指導計画（全10時間）

次	時	学習活動
I	1 2	○本教材のように物語の序盤と終盤で変容する物語を読み、『オセロボード』で紹介することを知る。
	3	○全文の読み聞かせを聞く。 ○初発の感想を書く。 ○初発の感想を交流し、学習課題を作る。
II	4 5	○物語を分かりやすくまとめよう。 ○登場人物、王子、王様、だんなさん、おくさんの性格について考える。
	6	○山場がどこかについて考える。
III	7 8 9 10	○並行読書の本から自分が紹介したい『オセロボード』作成する。  ○グループで交流後、その中の代表が全体に紹介する。

#### 7. 学習活動の実際と考察

I次1時では、以下のような言語活動のモデルを、指導者がパソコンのパワーポイント機能を使って、（成果物：『オセロボード』）を示した。【資料①】



その結果、児童からは「早くやってみたい。」  
 「これから、そんなことをすればよいのか。」  
 などのつぶやきが聞こえた。児童は学習意欲を高めるとともに、単元全体の活動内容の全体像や学習の目的を的確につかむことができたと考える。【視点①】

Ⅱ次4時では、以下のようにクラス内で習熟度別に班を大きく三つに編成した。【資料②】

**すいすい児童**…すすんで、自分の考えを形成したり、その考えを積極的に話したりして共有できる集団。

**どんどん児童**…指導者や友達からの少しの助言やヒントがあれば、自分の考えを形成したり、その考えを話したりして共有できる集団。

**じっくり児童**…自分の考えを形成するのに、指導者の助言や補説があればできるが、考えを共有するのに他の集団に比べて、多くの時間が必要になる集団。

#### 【資料②】習熟度別の児童の実態概要

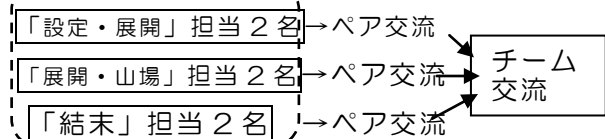
学習活動では、「はじめに」「つぎに」「さいごに」といったつながぎ言葉を使うことで、物語の「設定・展開」「山場」「結末」の構成を意識して、内容を短く三つにまとめることができるようにした。それぞれの集団での活動については以下のようにすすめた。【資料③】

**すいすい児童**…一人一人がそれぞれ、物語文を三つにまとめた後、「すいすいチーム」内で大事な言葉を確かめながら交流を行う。

**どんどん児童**…2人1組になり、はじめに、「設定・展開」ペア、「展開・山場」ペア、「結末」ペアというように役割を指導者が割り振り、一人で担当場所を短くまとめる。自分の担当場所が終わったら、別の場所をまとめてもよいことにする。同じ場所をまとめた者同士でペア交流を行い、最後に「どんどん児童」で「設定・展開」→「山場」→「結末」の順でチーム交流を行う。担当場所以外で、まとめられなかったところは友達から聞いて、書き記すようにする。

**じっくり児童**…「どんどん児童」と同様に以下のように一人→担当場所同士のペア交流→「じっくりチーム」での全体交流を行う。「どんどん児童」とのちがいは、自分の担当場所が終わったら、そこを読み返し、友達に伝えるように文を修正するように指示した。

--- 一人で ---、【チーム学習の流れ】

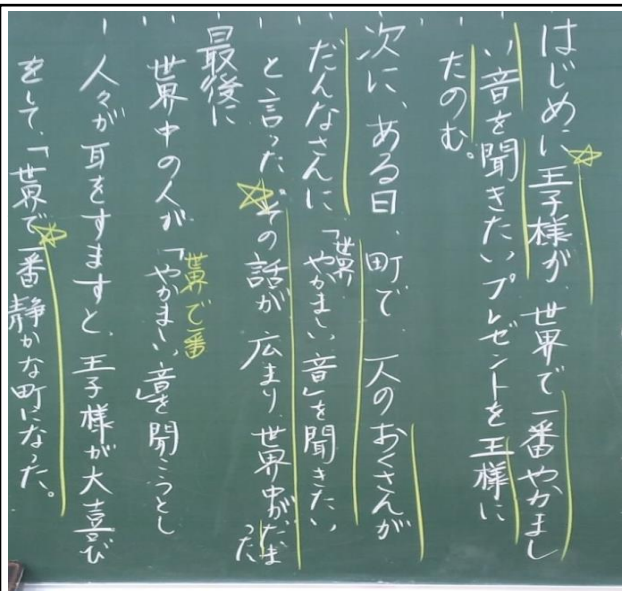


#### 【資料③】習熟度別小集団の活動概要

以上のように、児童の習熟の程度に応じて、役割分担を行い、物語文を「はじめ」「なか」「おわり」の三つに分けるようにした。

授業の最後に、それぞれのチームの代表が班の考えを発表できるようにした。繰り返してできた言葉に線を引くことで、大事な言葉

を意識できるようにした。大事な言葉に着目し、一つの文に「いつ」「どこ」「だれが」「何をどうしたのか」を意識して入れるようにすれば、分かりやすい文になることを印象付けるように指導者から補説した。【資料④】



【資料④】Ⅱ次4時 児童のまとめた内容

このように学習の量や速度を個に応じたものにすることで、一人一人の児童が時間をもてあますことなく、自力でできることを懸命に取り組み、チームやクラス全体で協働して話の構成や内容（の大体）を捉えることができた。【視点②】

Ⅱ次5時では以下のような表【資料⑤】を基に、登場人物、王子、王様、だんなさん、おくさんの性格について考えることができるようにした。

性格・人からの言葉表		(ふわり言葉)	
負けず嫌い	責任感が強い	協力する	親切で、助け合う
強い	正義感が強い	努力する	思いやりがある
きびしい・こわい・つめたい	がまん強い	うまく物事をこなす	勝手に立てて考える
	ルールを守る	おもしろい	前向き・明るい
	後ろ向き・暗い	えらそう	まわりに気をつかう
	まじめ	みえっぱり	ほがらか
	自分にあまい	少しわがまま	人をうたがわない
	人にきびしい	忘れんぼう	人を信じすぎる
	人をせめる	なまける	自分で考えない
		いいかげん	
	自分勝手	自己中心てき	
		おろか	

【資料⑤】性格マトリックス表

このように考えの形成の基になる語彙について、発表ノートを活用し、先に提示することで、児童はこれからの学習活動の見通しを

もち、自分の考えをもって物語文を読むことができた。その結果、読む目的を明確にして、提示された性格を表す言葉と叙述を関係付けながら読むことで登場人物の性格をより具体的に捉えることができた。【資料⑥】

- ・王子様はやかましい音を聞いても十分という気持ちになれないから、『わがまま』な性格だと思う。
- ・王様は『やさしい』けど、本文の（全世界のもとに同じことをさせたものとして…）から『こわい』『自分勝手』な性格だと思う
- ・おくさん・だんなさんは本文の（やかましい音を聞いてみたいの…）から『自分勝手』『わがまま』『ずるい』『少しいい加減』な性格だと思う。

#### 【資料⑥】Ⅱ次5時 児童の考え

授業終盤では、これまでに出了登場人物の性格を振り返り、「登場人物の性格で似ているところ（共通点）はどこですか。」と問うことで、「どの登場人物も『自分勝手』で、『自己中心的』な性格」であることに気付くことができた。このように、比較する活動を多く設けることで、具体性と抽象性を関連づける思考力や理由付けする思考力を育むことができたと考える。【視点③】

Ⅱ次6時ではタブレット端末にある発表ノートを活用し、山場がどこかについて考えた。児童の初発の感想を基に指導者が考えの選択肢を作成した。児童は以下の四つの中から選んで、授業に参加できるようにした。【資料⑦】

選んで、画面をそのままにしよう

①世界中の人が黙り、町が静まりかえる。

選んで、画面をそのままにしよう

③王子が自然の音を聞き、うれしそうにはしゃいでいる。

選んで、画面をそのままにしよう

②町の人がこそこそと家に帰る。

選んで、画面をそのままにしよう

④町がやかましくなくなる

#### 【資料⑦】児童の初発の考えを基に作成した考えの選択肢

以上の四つの選択肢から、児童が山場の理由を選べるようにした。選択肢を4色に色分けし、全員の考えを一斉に可視化できるよう

にすることで、互いの考えを全体で容易に共有することができた。その結果、「まずは、一番多い、〇〇の考えについてどう思いますか。」など、話を焦点化させることで、交流の糸口がつかみやすくなったと考える。【視点①】

Ⅱ次6時、授業の序盤で児童は以下のよう  
に考えが分かれていた。【資料⑧】

- ①世界中の人が黙り、町が静まりかえる。13名
- ②町の人がこそこそと家に帰る。0名
- ③王子が自然の音を聞き、うれしそうにはしゃいでいる。6名
- ④町がやかましくなくなる2名

#### 【資料⑧】授業の序盤における児童の考え

授業の中盤では、ペア交流をしても、学習場面を読んでも、なかなか活発な交流ができず、児童の思考は停滞していた。

授業の終盤では、指導者から教科書の手引きにある「言葉の力：物語の山場について考える」という「山場」の定義を全体で確かめた後、以下のような発問を行った。【資料⑨】

もし、王子が自然の音を気に入らないで怒っていたら、その後、町はどうなっていたのでしょうか。

#### 【仮定・推理】

#### 【資料⑨】児童の主体的な対話を促す発問

その結果、以下のように、子どもが自分の考えを交流する場面がみられ、そこから深い学びを生み出すことにつながったと考えられる。【資料⑩】 【視点③】

T：ペアで交流してみましょう。

#### <どの児童も夢中になって交流を行う。>

T：ペアで交流したこと



を全体で紹介してくれませんか。

C1：次の日もきっとがやがやうるさいと思うわ。

T：なんで、ですか。

C1：だって、王子様が鳥の声などに気付かずに怒っていたら、自然の音がわからずに、明日もやかましい町のままだったと思うからです。

C2：なぜなら、誕生日のプレゼントで、やかましい音で、王子の気持ちがいいようになるはずなのに…だけど、ほしい音ではないので、王子は、もっと怒って、もっと、自然の音が嫌いになっているから（町はうるさいままだったと思います。）

#### 【資料⑩】Ⅱ次6時授業終盤逐語録



このように「もし」という仮定を表すつなぎ言葉を活用し、「王子の反応・行動が本文とは真逆なら、どうなるのか」を推理できるようにした。その結果、児童は本文にある実際の結末と、自分が想像したもう一つの結末を比較することができた。このように比較を通して、物語の変化にある原因と結果について楽しみながら考え、山場について深く理解できたと考察する。【資料⑪】

- 【資料⑪】 児童のペア・全体交流後の授業終盤の考え

【資料⑫】

その結果、さらに学習の見通しをもつことにつながり、Ⅲ次7～9時（活用時）では、どの児童もいきいきと、楽しそうに、集中して学習活動に取り組むことができていた。【資料⑬】 【資料⑮】

Ⅲ次 10 時の全体への紹介で、児童 A はエリックと自分の家族を重ね合わせて考えることで、身近で何気ない言葉「さよなら」から「家族のつながり」や「身近な人との愛」の大切に気付くことができていた。【資料⑮】

【資料⑮】 児童 A が作成したデジタルボードの実際

児童の振り返りから、実際に自分で考えてまとめることで、「何が具体的に難しいのか。」そして、どうすれば上手くいくのかについて気付くことができた【資料⑯】。

前まではオセロボードはカンタンと思っていたけど、（実際にしてみると、）山場を書くのがとてもたいへんだった。結末のところを山場にもっていくことで、書くことができた。

【資料⑯】Ⅲ次 9 時：児童 A の振り返り

単元全体の振り返りでは、これからまとめた文章を書いたり、自分の考えをまとめるにあたって、どんなことに気を付けていけば、相手に伝わりやすくなるのかについて気付くことができた【資料⑰】。

前は分かりやすければ、（文章が）とても長くてよいと思っていたけれど、今は短くわかりやすいことが大切だと思いました。もし、長々と毎回書いていたら、とても読みにくい文になってしまうと思いました。

【資料⑰】Ⅲ次 10 時：児童 A の振り返り

## V 成果と課題

### 1. 成果

#### ○ICT の活用による選択・共有・可視化

- ・デジタルボードに「…だった。だけど、～になった。」という「つなぎ言葉」や「設定、展開」などの「学習用語」の入ったモデルを提示し、学習中に意識して読んだり書いたりできるようにすることで、山場（登場人物のなんらかの変化）の境目など構成を意識して、読むことにつながった。
- ・学習のねらいにあった教材を識別できるように色をつけたり、分類したりして提示することで、学習や交流のねらいが明確になり、自己の考えをもつことができるようにすることで、交流につながりやすくなり、交流から学習内容の理解を深めるもの（深い学び）となった。

#### ○小集団編成の工夫

- ・習熟度別のチーム編成は児童の理解する質・量・速さが似ているため、指導者がチーム毎の役割や学習手順を明確に示すことで、協働的な学習過程がふみやすくなる。

その結果、チーム内で他者をより、尊重したり、受容したりしながら、解決に向けて、粘り強く取り組みやすくなった。

#### ○主体性を高める工夫

- ・授業のはじめに、「何を」学ぶのかを（電子）掲示物などを活用し、児童自身が自覚できるようにすることで、進んでノートを振り返ったり、友達と話そうとしたりする姿が多く見られるようになった。
- ・目的に応じて情報や知識を選択したり再構成したりする場を設けることで、知識や技能が生きて働くものになった。
- ・「教材文の部分と部分」「自分と友達の考え」「教材の事実と自分の推理」など「比較」を意識した発問を行うことで、児童の内発的な動機を高めるものになった。

## 2. 課題

#### ○ICT の活用による選択・共有・可視化

- ・判断力や伝え合う力を効率よく育むためにもタブレット端末を授業のどの場面で、どのように使えば効果的なのかを継続して、研究する。
- ・タブレット操作が不慣れなため、時間を費やす児童も見られたため、各教科で系統立ててスキルを習得できるようにする。

#### ○小集団編成の工夫

- ・学習の目的に応じて、より能動的に機能する役割分担や学習手順を開発していく。
- ・課題別の小集団編成のあり方も模索していく。

#### ○主体性を高める工夫

- ・タブレット端末で活用できる既存の教材が少ないため、「選択」や「比較」に重点をおいて、新しい教材を開発していく。

## VI おわりに

【資料⑭】で示した児童 A の「先生、こんな楽しい授業初めて。楽しくて楽しく仕方が

ない。」の言葉は、考えを形成し、交流（自己を表現し、他者を受容）することを通して、互いの考えを共有する学習が創り出したものだといえる。一人でも多くの児童からこうした言葉を聞くことができるよう、主体的・対話的で深い学びの構築に向けた研究実践を積み重ねていきたい。